

ホームビジット活動の日本語教育における可能性

—インタビューを目的とする場合—

鈴木 伸子

1. はじめに

教室内で獲得した日本語の運用能力や日本語・日本事情に関する知識を、現実社会の中で日本語母語話者を相手にしたときにも発揮できるよう、教室外のオーセンティックな状況で、母語話者との会話場面に参加する学習活動が幾つかある。その中には、ホームステイや遠方へ出かけるフィールドトリップのように生活体験や観光という要素が加わった活動のほか、ホームビジット（以下、HV）といった試みもある。

筆者は、これらの中でも時間的な拘束が短く、受け入れ側・訪問側どちらのプログラム参加者にとっても、比較的負担が少ないHVを行なった。さらに、おしゃべりに終始する訪問ではなく、目的を持って訪問するために、インタビューという訪問目的を設定した。

本発表は、この実践の概要報告（鈴木 2000）とその談話的な特徴を踏まえ（鈴木 2006）、HVが学習活動として何を提供しうるのかを考察するものである。そのために、以下四つの研究課題を設定した。

- 1) HVの参加回数に応じた感想の変化
- 2) HV談話の談話的な特徴
- 3) HVの場面的な特徴
- 4) HVインタビューの答え方と談話形成

2. 実践の概要

都内の大学で「日本事情」クラスを履修する日本語日本文化研修生及び特別交換留学生 20名と研究生 2名の合計 22名。授業ではグループによるプロジェクトワークを行なっており、それぞれ「日本の女子高生のファッション」「日本人の読書傾向」「日本の大学生と飲酒」などをテーマに調査を行なっており、その調査の一環として日本人へのインタビューを希望した者がホームビジットに参加した。実施

は 2001 年春学期（4月～7月）で、5月に 15名、6月 14名が参加し、そのうち 10名が 2回連続で訪問を経験した。実践にあたっては、「日本事情」クラスの延長という形で、インタビュー調査という目的を設定した。インタビューは、即興的に展開される会話内容の幾分かを事前に準備することが可能であり、インタビュア側が主体となって会話を進めることができる。言語的スキルが高い学習者はもちろん、充分ではない学習者にも積極的な参加が可能ではないかと思われた。

2.1 HV参加者のプロフィール

1) 留学生側…国籍は、韓国・台湾・オーストラリア・英国・香港・シンガポール・中国・ロシア・キルギスの計九ヶ国で、出身の異なる二名によるペアで訪問を行なった。留学生の日本語レベルは、筑波大学留学生センター開発の SPOT（Simple Performance Oriented Test）¹で最も難しい Aタイプで測定したところ、65点満点で 22名中 5名が満点、平均で 61.32点という結果が得られた。概ね中級から上級にかけての学習者グループと言えよう。

2) 日本語母語話者側…30代から 60代までの夫婦もしくは夫婦と子どもによる全 10 家族。異文化接触体験という点では、頻繁に米国出張のある 60代男性 1名、60代の大学教員 1名、アジアに海外赴任経験のある 60代夫妻 1組以外は、非母語話者との日常的な接点は特になく、海外旅行の経験がある程度。

2.2 HV実施の手順

学習者には、訪問の前後を通じて複数の課題が設定されている。特に、訪問前には先方への電話や交通の確認などの作業があり、各人への負荷は高い。そのうち、電話会話の前には個人ロールプレイを実

施し、電話をかけた留学生が会話内容を失念するリスクを回避するため、電話会話の録音も行った。訪問中には、インタビューによる情報収集と円滑なコミュニケーションの実現を目指し、訪問後はその成果をプロジェクトワークに反映させた。さらに訪問の反省とお礼状によってプログラムを締めくくることとした。そのいずれにおいても、個々の言語スキルに対して「できると思うか」(事前)および「できた」(事後)を問う質問紙を実施し、自分の日本語力を意識させた。

- ① 訪問前：インタビューシートの作成、電話による時間設定と道順の確認、訪問で必要な言語スキルを内省するアンケート
- ② 訪問中：インタビューの実施、敬語など待遇表現、適切な言語・非言語行動
- ③ 訪問後：お礼状執筆、インタビュー内容のまとめ、訪問の反省

3. 分析

3.1 参加回数とHV感想の変化

今回のHV実践では、初回参加の15名、2回目参加の14名のうち、10名が連続で参加した。この参加者たちに、参加者に訪問後の感想を尋ねた(図表1参照)。

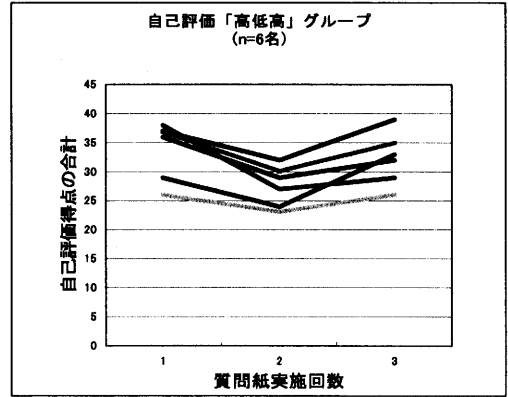
図表1・HV参加者の感想の変化

順位	第1セッション終了後の感想(n=15)	第2セッション終了後の感想(n=14)
1	上手く話せないところがあった 6名	面白かった・楽しかった・嬉しかった 5名
2	緊張した 6名	上手く話せないところがあった 4名
3	面白かった・楽しかった・嬉しかった 5名	リラックスできた 4名
4	良い人たちだった 3名	国際事情の比較ができた 3名
5	住まいが素敵だった 3名	勉強になった 3名
6	マナーがわからなかった 3名	緊張した 2名
7	国際事情の比較ができた 2名	日本の家族の特徴がわかった 2名
8	勉強になった 2名	良い人たちだった 1名
9	年上という感じがしなかった 1名	年上という感じがしなかった 1名
10	日本の家族の特徴がわかった 1名	マナーがわからなかった 1名
11	リラックスできた 0名	住まいが素敵だった 0名

その結果、初回訪問後は、うまく話せなかった・緊張した、という声が上位にあり、楽しかった・面白かった、という声はその後続く。しかし、二回目となると、「緊張した」という声以上に、面白かったという声が強くなり、さらにはリラックスできた、という者も登場する。初回と二回目の違いはかなり大きいことが窺える。

そこで、HVにおける言語行動や非言語行動につ

グラフ1・自己評価の変化



いて、「できる」もしくは「できた」のか、参加者全員に対して実施した質問紙の中から、二回連続参加者10名をピックアップしてその変化を分析してみた。質問紙は、訪問前・初回訪問後・二回目訪問後と計三回実施している。

すると、三種類の変化傾向が現れた。即ち、訪問前の自己評価が高い→低下→上昇(6名※グラフ1参照)したグループ、自己評価が低下し続けた(2名)、その反対に上昇し続けたグループ(2名)である。つまり、一回だけの訪問で終わった場合、自信を失う、もしくは自分の自信過剰を知る、だけで終わってしまうが、二回目以上の参加によって、

HVでのコミュニケーションを楽しむことができ、言語行動についても、初回以上にうまくできた、と自己評価が上がるということがわかった。

ところで、表1を見ると、「うまく話せなかった」という声は1回目も2回目も上位にある。つまり、楽しいという感想はありつつも、ホームビジットにおけるコミュニケーションは難易度が高い、と感じられていることが窺える。フォローアップイン

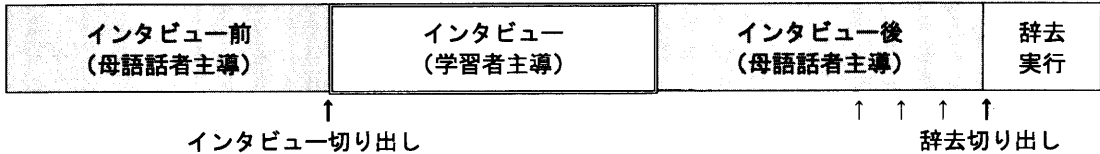
インタビューでその点を詳しく聞いてみると、「敬語が上手く使えなかった」「そろそろ帰りたい、と言いつ出すのが難しかった」という参加者が複数いた。そこで、次はホームビジットにおける会話の難しさを、談話的側面から分析してみることにした。

3.2 インタビュー目的HVに共通する談話構造

HV 会話のうち、冒頭から辞去までが全て収録された6本分を対象に、それらに共通する全体構造を分析した。すると、HV は冒頭ではホスト側のNSによる談話管理で始まるが、その後、インタビューの開始とともにNNSへと主導権が移る。そのインタビューが終わると、再びNS主導の会話となる。この展開の中で、主導権の移る箇所が二カ所ある。その移動を実現する二種類の切り出し発話に、難しさがあることが分かった。

例えば、次の会話例を見てほしい。ここではイン

図表2・HVに共通する談話構造



タビューの切り出し発話が登場しているが、その発話は主導権の移動を実現していない。場面は、訪問直後のことで、吉武妻はお茶の支度のためにキッチンにおり、不在である。

【会話例・吉武家訪問】K=訪問学生

- 17 **K**: えー、私一たちは、んん、プロジェクトワークの、日本の女性のことで、えっと調べているんですけど、えっと、その中で、なんだったか、あのーなんか質問とかあるんですけども、そのテーマには3つがありまして《中略》ということ、を、ちょっと、あー調べて、はい。(【夫】ははは、面白い)はい。今日の機会、もうちょっと、吉武さんと奥さんのご意見を聞かせて頂きます。
- 18 **夫**: オーケーオーケー(笑いながら)わかった。(【K】すみません) 今、あのー、ちょっと、家内が、お茶の、支度してるから。あのー、こちらへ来ますから。僕もちょっと写真写すから。こういうね、畳の部屋は、あんまり、す、座らないでしょ？
- 19 S: ぜんぜん

Kは「吉武さんと奥さん」に話を聞きたい、と切り出したものの、目の前には夫しかいない。そして、当の吉武氏は彼女の切り出しを保留し(第18発話)新しい話題(畳の部屋)を持ち出している。

つまり、切り出し発話は、切り出した側の思惑だけではなく、それを受ける側の思惑や状況が一致していないと、主導権が移動する談話の転換には結びつかない。会話を巡る状況をどれだけ見極められているかがカギとなるが、この移動が実現しなかったことには、切り出した側の文脈への配慮が不十分だった、という事情がある。

このように、円滑な談話を展開するには、発話における場面状況への配慮が極めて重要となる。そこで次は、HV という場面には、どのような文脈が存在するのか、特にNSにとって家庭という場がどのような意味を持つのかを探ることにした。

3.3 NSの“自宅”という接触場面

岩田(2005)は、顔見知りの留学生と日本人学生による接触場面会話において、当初、“留学生対日本人”と対立していた両者のアイデンティティ・カテゴリーが、話題に応じて“スポーツ愛好者”“同じイベントに参加する者”という共通するカテゴリーへと変化し、それにつれて会話の様相も、どちらか一方が会話の進行を管理する非対称のやり取りから、対等に応答する対称的で噛み合った会話へと変化する現象を指摘した。

接触場面の会話では、話題の変化に応じてアイデンティティ・カテゴリーも変化し、それによって談話的な特徴も変化する。この現象を踏まえてHV会話を振り返ってみると、やはり話題に応じたアイデンティティ・カテゴリーの変化は予想される。しかし、岩田が対象とした接触場面とは異なり、筆者が実践したHVは、留学生と、40~60代の日本人夫妻を中心とする家族の組み合わせであり、会話の冒頭こそ、“日本語の勉強をしにきた留学生”と“日本語の学習に協力する日本人”というNS-NNSの対立を基本とするカテゴリーから始まることは容易に想像されるが、その後の展開には家族の発話や自

宅ならでは、の話題によって大きく変化する。特に、公私が明確に分かれることの多い日本人男性には、単独で参加する接触場面とは異なるカテゴリー変化が見られる可能性が高い。その典型例として、重武家での談話を分析したところ、冒頭では強い談話管理を行っていた夫が、アルコールの話題になると、夫＝アルコール好きの中年男性というアイデンティティに、残りの女性陣＝それを容認できない同士、というアイデンティティでの対立を見せた。こうした発話者の役割変化に加えて、笑いの増加も加わり、NNS はビジターとして質問されるばかりの立場ではなくなり、会話管理にも関与できるようになった。

3.4 HV インタビューの応答と談話の変化

談話の展開には共通点が見られたが、個々の会話における話談あたり発話数や留学生に依る発話開始頻度などを比べると、違いが生じる。そこで、同じ留学生ペアが、異なる日本人宅二軒を訪れた際の会話データを対象に、二つの談話分析を行った。まずは、「お袋の味」という同じ会話部分において、話題を開始した発話者が誰で、その話題とはく同一・派生・異種>の三つの相互テーマ展開構造のうち、どれかを調べた。さらに、留学生のインタビューに答える時の NS の発話が、「日本では」という社会一般による観点によるものか、「私の場合は」とい個人的な観点によるものか、を調べると、以下のような違いがあった。

	話題開始した発話者と相互テーマ展開構造	社会一般 or 私的観点
A宅	夫の「同一」が最多	社会一般が多
B宅	留学生の「派生」が最多	私的観点が多

つまり、日本社会に関して議論が展開される時、そのトピックは、NS によって主張されるべき事柄として認識される。しかし、そのように『日本人』同士の事柄」とされる話題であっても、それがごく個人的な方向へとシフトした場合、その話題に関する優先権は「日本人」全体に属するものではなくなる。優先権を主張できるのは、「私」の他に

ないからだ。その結果、NNS であれ、NS であれ、「私」以外は等しく優先権を主張できなくなり、全員が非・当事者として等しく「私」の事柄に言及する余地がうまれるのではないだろうか。この仮説が正しいのならば、発話者の個人的な側面が見えやすい発話には、接触場面において「日本人」という壁を超える突破口となるのではないかと考える。

4. 結論とまとめ

HV には、他の学習活動には見られない特徴が多くあり、そのようなオーセンティックな場面での活動には多くの可能性が秘められている。特に、私的な色彩が強いという点（私的なアイデンティティ、家族の存在、文脈）からは、話しやすさ・寛ぎという要素が生まれる。また、個人的な色彩が強くなることから、「日本人／外国人」という二極対立から脱して、「個人／個人」とい対話に移行する可能性が秘められているのではないかと考える。

注

1. SPOT とは、ひらがな一字が空白の短文を、テープ録音を聞きながら穴埋め作業をしていくテスト。1990 年に筑波大学留学生センターで試用され、従来型のプレースメントテストとの高い相関を示した（小林 1997）。

参考文献

- 岩田夏穂（2005）「日本語学習者と母語話者の会話参加における変化 —非対称的参加から対称的参加へ—」『世界の日本語教育』pp.135-150 国際交流基金
- 鈴木伸子（2004）「日本事情クラスにおける家庭訪問プログラムの試み」『世界の日本語教育<日本語教育事情報告編>』7 pp.209-225 国際交流基金日本語国際センター
- 鈴木伸子（2005）「留学生に対する日本人協力者の個人化した説明が談話の展開に与える影響」『リテラシーズ』1 pp. 55-68 くろしお出版
- 鈴木伸子（2006）「ホームビジットで学習者が体験する談話の展開—インタビューを目的とする場合—」『人間文化論叢』Vol.9 pp. 211-222 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科